

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23710321

研究課題名（和文） 女性の「労働」・「協働」の再構成に向けた実践の事例調査と課題の分析

研究課題名（英文） Case research and analysis of problems in practices for the reconfiguration of women's "labor" and "cooperation"

研究代表者

村上 潔（MURAKAMI KIYOSHI）

立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師

研究者番号：00588402

研究成果の概要（和文）：

本研究では以下の 3 点の成果を得ることができた。1980 年前後の、女性労働者の「保護」と「平等」をめぐる女性運動の対立構造を解明し、雇用のシステムそのものを批判する運動の存在意義を明らかにした。主婦の自律的労働実践として始まったワーカーズ・コレクティブが、社会的包摂の主体となるべく刷新を進めている現状の意味を解明した。

労働に収斂されない女性（特に主婦）の「協働」の本来的可能性を、エコフェミニズムの観点から解明した。

研究成果の概要（英文）：

This study produced the following three results. (1) The conflict structure of the inside of the women's movement over "protection" and "equality" for working women in about 1980 was elucidated, and the significance of the existence of the movement that criticized the "employment" system itself became clear. (2) The meaning of the present state in which the Workers' Collective, which began as autonomous labor practice of housewives, is metamorphosing into the subject of social inclusion was clarified. (3) The radical possibility of women's (housewives') "cooperation" that exists around "labor" was defined from the viewpoint of ecofeminism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：現代女性運動史

科研費の分科・細目：ジェンダー、ジェンダー

キーワード：女性労働、女性の貧困、協同労働、協働、共助、地域社会、主婦、ワーカーズ・コレクティブ

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの研究経緯

代表者（村上）はこれまで、「戦後日本における「主婦」の「労働」をめぐる思想と運動の同時代史」というテーマに集約される研究を進めてきた。そこでの作業は、主婦が/女性が、「主婦」であるということによって規定される「労働」の性格について、自ら問題提起してきた女性当事者たちの思考・活動を確認するというものであった。具体的には、まず 1955 年以降の「主婦論争」の整理から、“働

くべきかべきでないか、もしくは働かないからこそできる運動をするべきか”という 3 極点構造からは、“否応なく働かざるをえない”層の女性たちの存在が抜け落ち、その利害が見落とされてしまうことを指摘した（論文「『主婦論争』再検討 論調と対象の再整理からみる課題と展望」〔のち『主婦と労働のもつれ』所収〕）。

次に、高度経済成長期に多くの主婦たちを吸収した「パート労働」の評価について検討した。パート労働を未来の理想的な働き方と

して肯定的に評価する見方には、当事者の労働者性への配慮が足りず、逆に労働力搾取として否定的に評価する見方も、その対策として「意識の低い女性たちを大きな単位の労働運動に組み込み戦力化する」方向性を強調するのに終始し、いずれにせよ、働く主婦当事者の利害や志向に深く向き合ったものではなかった(論文「初期パート労働評価について」〔のち『主婦と労働のもつれ』所収〕)。

そこで代表者は、1970～80年代の主婦たちによる、「労働」に対する自律的な思想・運動構築の様相を確認する作業に取り組んだ。まず、1975年以降東京の多摩地域を拠点に活動を展開した、主婦たちによるウーマンリブのネットワーク 主婦戦線 について検討し、主婦の労働市場からのノ労働市場における(二重の)疎外状況を、当事者自身が明確に問題化していたことを明らかにした(論文「「主婦」を基点として女解放を追求する思想と運動 主婦戦線 の事例から」〔のち『主婦と労働のもつれ』所収〕)。

そして、主婦戦線 から派生した2つの活動組織の運動を確認することで、パート労働問題に対する主婦当事者としての提言の様態を確認した。ここでは、現行市場では様々な制約で「働ききれない」状況に置かれている主婦が、いかに時給労働者として権利・保障を付与されるべきなのか、税制の改革や労働法の固持といった論点から方針が設定されていた(論文「「パート」問題を捉える視座としての「主婦」問題・「労働」問題 主婦の立場から女解放を考える会・パート・未組織労働者連絡会 の試みから」〔のち『主婦と労働のもつれ』所収〕)。

こうした思想・運動成果を受けて、いま「女性」が「働く」問題について何が考えられるのか。「働かざるをえない」・「働ききれない」・「働けない」という様々な困難を抱える女性たちが、いかに各々の利害を調整しつつ「労働」問題に向き合っていけるのか。その思考の土壌を作りたいと考えた。

(2) 研究の全体構想

代表者は、上記の「主婦」による「労働」へのアプローチを考察する取り組みの一環として、「ワーカーズ・コレクティブ」の検討を進めている(論文「「主婦によるオルタナティブな労働実践」の岐路 ワーカーズ・コレクティブはどう変わっていくのか」〔のち『主婦と労働のもつれ』所収〕)。1980年代に大きく取り沙汰された、主婦による、市場労働に対抗する労働実践の歴史的・現在の意味を、枠組みの中心に据えて考えてみたい。また、もう一つ、申請者が重視している問題が、「女性の貧困」という状況・概念をいかに整理するかという点である。これは2008年以降の動向を運動団体の実態を追うことで一定の定義付けを行なった(論文「女

性とノの貧困」の問題化におけるアジェンダと展望 女性と貧困ネットワーク の事例から」『社会文化研究』第13号、2011年)。

ここから、女性のパート・派遣などの低条件・不安定就労の問題、ワーカーズ・コレクティブのような自律的な働きかたの模索の意味、「女性の貧困」働かない/働けない 問題、をすべて連関させて考えていく作業に入りたい。

単純により多く働く、より高い価値付けで働くことが目的とはならない女性の労働運動とは何か。働けない女性の労働運動とは何か。「労働」を拒否する「協働」とはいかなるものなのか。「賃労働」に対して異なる利害をもつ女性同士がいかに協調しうるのか。これらを明らかにする。

(3) 研究の学術的背景

女性労働研究の土壌のうえでいえば、「労働運動フェミニズムの限界/陥穽」という問題に行き当たる。もちろん、現実に女性の働く条件を整備することは常に必要とされる課題であるが、一方で、その「改善」が女性を抑圧する市場労働・労働形態を「延命」させている側面は否定できない。それでは結局、その体制に順応できる女性とできない女性が分断され、後者の問題は「労働問題」とは別問題として扱われる。これでは女性の「労働」を捉えたことにはならない。

「社会的排除」に関する研究を鑑みれば、現在は、「働く権利」以前に「働けないもの生存」が喫緊の問題になっていることは明らかである。したがって、「貧困」問題と「労働」問題を分けて考えることはできない。女性が労働市場の中で置かれている状況、外に置かれている状況、その状況への対応・対抗策、そのための活動組織作りのありかた、を総合的に検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 概要

主婦による自律的な労働実践としての「ワーカーズ・コレクティブ」が1980年代に注目されて以降、日本では、女性の「協働」(「協同労働」ならびにNPO活動・ボランティア活動)の概念は長く更新されずにきた。本研究は、現時点での女性の「協働」の多様なありかたと、そこでの葛藤や困難さを詳細に捉え、何が障壁となっているのか、それに対する現実的な対応策はどのようなものか、将来的に女性の「協働」はどう変化していくのかを検討するものである。その際、「働けない」・「貧困」女性の利害を導入することで、分析枠組み自体のありかたを大きく更新する。

(2) 研究期間内に何をどこまで明らかにするのか

以下、順に列挙する。

女性労働者の「保護」と「平等」をめぐる、過去の女性運動がどのような議論を展開し、方針を定め、運動を構築していたのかを確認する。その際、各運動は、女性労働者間の階層性をどう認識し、どういった立場性を基軸にしていたのか、その運動の構造は、現在の雇用・労働環境や関係する法制度に対峙する際に、いかなる意味をもって参照することができるのかを解明する。

ワーカーズ・コレクティブの性格はどのように変化してきているのかを把握する。当初の、比較的「余裕のある」主婦だけによって成り立っていた時期から、「働けない」若者や障害者の受け皿となることを期待されるようになった現状までの推移を、インタビュー調査等によって正確につかむ。

「女性の貧困」に取り組む運動組織の多様な形態を把握する。その際、東京と地方との状況の違いや、隣接する運動（反貧困運動や障害者運動など）との関係性のヴァリエーションを整理する。

「オルタナティブな労働」を模索する流れと、「貧困」を問題とする流れが、どのように合流しているのかを確認する。そこで生じる葛藤や対立状況を明確にする。

最後に、従来の運動が培ってきた「成果」を、どのように批判的に継承していくべきなのかを明らかにする。たとえば、「男女共同参画」や「ワーク・ライフ・バランス」という、いまや国も自治体も企業も推進する政策のありかたに対して、女性運動はいかなる立場をとるべきか、といった問題に答えを出す。
(3) 学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

社会学の範疇では、社会的排除や貧困問題に関する研究は蓄積が多い。また、ジェンダー研究の範疇では、シングルマザーの生活実態調査や、雇用における均等待遇に関する研究成果がある。しかし、女性の労働と貧困の関係性を、たんに雇用条件の面から捉えるのではなく、雇用 被雇用を前提としない「協働」の可能性まで組み込んで捉えようとする本研究は、これまでにない女性をめぐる問題の地平を設定しうるものである。また、実際に「女性の貧困」に関する取り組みを行なっている女性たちの運動に即して分析を進めることから、社会運動論の分野にも寄与するものとなる。「働かない/働けない」という労働規範と実態の差異をめぐる問題、そして労働の「拒否」をめぐる問題系を設定することから、近年の所得保障をめぐる理論の枠組みにもアプローチすることになる。

フェミニズム研究における意義としては、まず、労働運動フェミニズムをどのように変質させていくべきかを模索している点がある。と同時に、エコフェミニズムに代表される、市場労働に対抗する理論の批判的検討と

なる。さらに、女性による「運動」構築のありかたの検討でもある。ウーマンリブの系譜を継ぐラディカルな運動と、アドボカシー戦略の同時進行はいかにして可能なのか、いかにあるべきなのかを検討する。また、対外的なアピール活動と、内部でのピアカウンセリング活動のバランスのありかた、といった問題にも言及することになる。

予想される結果として、主婦と非正規就労女性の立場による利害の差異が、地域やコミュニティにおける「協働」の取り組みに及ぼす影響が浮かび上がるはずである。たんなる利害対立は一般論で言えるが、その内実はほとんど検討されていない。楽観的に根拠のない「女性の連帯」を説くのではなく、無条件に対立図式を設定するのではなく、女性の「協働」を実現させるにはどのような関係調整が必要なのかが明らかにされるべきであり、本研究はそれに答えるものとなる。

3. 研究の方法

以下、順に列挙する。

女性労働者の「保護」と「平等」をめぐる過去の女性運動の実態については、1980年前後の各団体の機関紙・ビラといった資料（ならびにそれらを編纂した書籍）を用いて分析する。主な対象団体は、1979年結成の私たちの男女雇用平等法をつくる会 と、1975年結成の 主婦戦線、ならびにその 主婦戦線 から派生するかたちで1978年に結成された 主婦の立場から女解放を考える会 である。必要に応じて、同時期のその他の団体の資料を検討する。

ワーカーズ・コレクティブの変容については、まず、以下の資料の収集・分析を行なう。

(a) 1995年にワーカーズ・コレクティブの全国組織として設立された ワーカーズ・コレクティブネットワークジャパン が発行している記録集（『ワーカーズ・コレクティブネットワークジャパン 10周年「第7回ワーカーズ・コレクティブ全国会議 in 神奈川」記録集』（2006年）など）などの資料ならびに同団体のホームページ。

(b) 1989年に設立された 神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会 が発行している冊子（『女性・市民が拓くあたらしい時代 神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会 10周年記念誌』（2000年）など）などの資料ならびに同連合会のホームページ。

(c) 2004年に設立された NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会 の機関情報紙『SEN (social enterprise network)』ならびに同協会のホームページ。

加えて、近年の、「WISE」（労働包括型社会的企業）に関する研究論文や、「協同労働の協同組合」に関する新聞記事・関連資料を収集し、整理する。

そのうえで、NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会 事務局長の岡田百合子氏にインタビュー調査を行なう。

女性の「貧困」問題については、当初、2008年に東京で結成された「女性と貧困ネットワーク」を主な研究対象とする予定であったが、同ネットワークが2011年以降実質的には活動休止状態となったため、変更を余儀なくされた。新たに主たる対象としたのは、愛知県名古屋市の民間多目的スペース「ナゴヤ駅西サンサロ*サロン」である。同サロンは、若年失業者、生活保護受給者たちを中心とした緩やかな自助グループ的取り組みを行っており、女性の参加者も一定数存在する。定期的に訪問し、ミーティングに参加するなどして、参加者の話を聞く機会と、サロンの運営に関する情報を得る機会を作る。

また、代表者の現居住地である京都で活動している「反貧困ネットワーク京都」の企画にも、定期的に参加し、情報を得る。

「労働」を前提・媒介としない女性の「協働」(活動・運動)の可能性については、国内外のエコフェミニズムの理論(マリア・ミース、クラウディア・フォン・ヴェールホフ、ヴァンダナ・シヴァ、森崎和江ほか)を参照しつつ、過去に存在した女性主体の環境運動や、共同保育の実践に関する記録などを検討することを通して、解明を目指す。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

研究の成果を、以下3点に分類したうえでまとめる。

1980年前後の日本における、女性労働者の「保護」と「平等」をめぐる女性運動の特徴の分析。

この成果は、論文「労働基準法改定の動静における女性運動内部の相克とその意味

「保護」と「平等」をめぐる陥穽点を軸として」である。

ここでは、1978年頃から1985年頃まで続いた、労働基準法の改定と男女雇用平等法立法をめぐる女性運動内部のスタンスの差異と対立状況を確認することで、「保護」・「(男女)平等」といった論点によっていかなる認識の違いが露呈し、いかなる陥穽が生じるのかを確認した。具体的には、現行の雇用環境において「(男女)平等」を求めることが、女性の階層分化と女性間差別構造を促進してしまう危険性を指摘し、男女雇用平等法に反対した女性運動が存在したこととその意義を明示し、さらにその後の男女雇用機会均等法を中心とした女性労働力の分割統治構造のもとで、女性労働運動は自らの明確な主体性(階層・労働者性)の認識のもとに労働法制と向き合っていかなるをえない状況にあることを示した。そして、雇用労働の世界

の周縁に位置づけられる女性労働者自身による運動が、今後ますます重要な意味を持つてくることを論じた。

主婦の自律的労働実践として始まった、日本のワーカーズ・コレクティブの変容の意味の批判的検討。

この成果は、論文「主婦の労働実践としてのワーカーズ・コレクティブの岐路 「依存」と「包摂」のあいだで」(共編著『差異の撃争点 現代の差別を読み解く』所収)と、岡田百合子(聞き手=村上潔)「(インタビュー)変容する女性主体の協同労働のありかた ワーカーズ・コレクティブの現在の意義を見据える」である。

前者では、近年ワーカーズ・コレクティブが、雇用されるかたちでは「働けない」若者や障害者の就労の受け皿となり、社会的包摂の機能を担う存在となる方向性を示していることを確認したうえで、それが本来の「(雇用されて働いていない)主婦による協同労働」としての側面と照らし合わせた際に、どう理念的に合致するのか、矛盾するのか、現実的にはいかなる問題が生じるのか、を検討した。具体的には、企業社会のなかで雇用されて働く夫に依存する立場である主婦は、その立場ゆえに企業社会のオルタナティブとしてワーカーズ・コレクティブの実践を行なうことが可能となっている、という本来的に矛盾を孕んだ前提と、そのワーカーズ・コレクティブが、企業社会に入ることができない(できなかった)若者や障害者を受け入れることは表面的には(矛盾を看過すれば)正当性があること、しかし実際には配偶者控除など夫への「依存」を前提としたシステムの範囲内で働く環境に他者を参入させることで、必然的に(経済的自立を目指しつつも困難に直面するなど)現実的な問題が生起すること、などを指摘した。

そして、以上のような点について、NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会 事務局長の岡田百合子氏へのインタビューで裏づけを取ることができた。その結果、若者らが参入して経営的にも組織運営的にも「成功」している事業所は、一般営利企業並みの緻密なマニュアルや職務評価システムが確立しており、なおかつ働く若者たちが「より多く働く」ことをあまり志向しない傾向があること、その若者たちは多く働く必要がない家庭・経済環境にあることなどが確認できた。また、介護保険制度への参入によって、介護系事業所の経営は安定したが、それによって内部ではワーカーズ・コレクティブの理念に反した方向性が惹起してしまったことなど、理念と経営・運営のズレをすり合わせる課題がつけねに存在することが明らかとなった。一方で、シングルマザーのような「貧困」状況にある女性たちをワーカーズ・コレクティブ

が「引き受ける」ことの限界と(当事者たちの)メリットが示され、今後積極的に彼女らを 適宜自治体の支援体制などと協同しながら 受け入れていこうとしている方向性を確認することができた。

労働に収斂されない女性(主婦)の「協働」(的運動)の現在の可能性に関する考察。

この成果は、学会報告「女性運動」の奪還 生活の主体として抑圧に対峙する立場性の再定位」と、2つの論文(「主婦は防衛する 暮らし・子ども・自然」ならびに「女の領地戦 始原の資源を取り戻す」)である。

ここでは、主にエコフェミニズムの主要な論点を振り返り、整理することから、現代日本において女性、特に主婦たちが、労働以外の要因によって集まり、行動し、活動・運動を展開していくうえでの背景・原動力・結合原理・方向性について検討した。そこでは、往々にしてフェミニズム(理論・運動)から批判される「母性」そして「子どものために」というスローガン を盾にした女性の運動原理がもつ大局的な意味を捉え直し、それに否定的ではない評価のありかたを設定する必要があること、「女性化」され収奪され破壊された(されつつある)「自然」と女性との関係性をより深く辿る道筋を、都市部の女性(主婦)たちが活動を通して自ら切り開いていくことの重要性を論じた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果の意義は、以下の3点を総合的に解明したことに見出すことができる。

過去の、労働運動としての女性運動が担保していた、雇用・労働をめぐる複層的立場性(内部における対立)の積極的意味。

既存の市場における労働の外側にある自律的労働実践が、「主婦」によって担われてきたことの意味、そしてそれが変質し他者を包摂する枠組みとなってきたことの意味。

女性(主婦)であるがゆえの、「労働」以外の協働の側面に働く原理と、その背景、その運動としての可能性。

これは、女性の「労働」と「協働」(の関係性)について、当事者たちの活動・運動を軸にした議論を展開していくうえで、大きな意味をもつ成果と言ってよいだろう。ここでは、歴史的な縦軸と、労働からの距離を測る横軸とを交差させた視座をもって、各課題を位置づけ、大まかな分析の方向性を提示することができた。したがって、今後は、各課題のディテールを詳らかにすべく、代表的な対象にアプローチをしていく必要がある。

(3) 今後の展望

本研究の成果を活かし、より深化させるため、2013年度からは、「主婦」という立場性のもとに労働運動に関わっていた女性たちが、労働組合のなかでいかなる存在として機能していたのか、労組の婦人労働者たちといかなる関係性を構築していたのか、いかにして労働運動から地域での活動(環境問題に取り組むNPOなど)へとシフトしていったのか、という課題に取り組む。主な研究対象とするは、熊本県水俣市の、新日本窒素肥料株式会社(チッソ株式会社)水俣工場の労働組合の一組織であった「主婦の会」の元会員である。この研究は、科学研究費助成事業(若手研究(B)|2013年度~2014年度|研究代表者:村上潔|研究課題名:「新日窒労組主婦の会」の歩みの記録とその女性運動史的分析)|研究課題番号:25870917)として実施する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

著者名:村上潔、論文タイトル:「女の領地戦 始原の資源を取り戻す」、雑誌名:『生存学』、査読:無、巻:6、発行年:2013、ページ:379-393

著者名:村上潔、論文タイトル:「主婦は防衛する 暮らし・子ども・自然」、雑誌名:『被曝社会年報』、査読:無、巻:1(2012-2013)、発行年:2013、ページ:150-175

著者名:岡田百合子(聞き手=村上潔)、論文タイトル:「(インタビュー)変容する女性主体の協同労働のありかた ワーカーズ・コレクティブの現在の意義を見据える」、雑誌名:『現代思想』、査読:無、巻:40(15)、発行年:2012、ページ:144-157

著者名:村上潔、論文タイトル:「労働基準法改定の動静における女性運動内部の相克とその意味 「保護」と「平等」をめぐる陥穽点を軸として」、雑誌名:『現代社会学理論研究』、査読:有、巻:6、発行年:2012、ページ:89-101

[学会発表](計2件)

発表者名:村上潔、発表タイトル:「女性運動」の奪還 生活の主体として抑圧に対峙する立場性の再定位」、学会名:社会文化学会第15回全国大会、発表年月日:2012年11月25日、発表場所:デザイン・クリエイティブセンター神戸(旧国立生糸検査所)(兵庫県)

発表者名:村上潔、発表タイトル:「消費者」から先に進んだ主婦たちの協同労働実践から30年 顕在化した課題の指摘」、学会

名：同時代史学会第3回関西研究会、発表年月日：2012年2月19日、発表場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス（大阪府）

〔図書〕（計3件）

著者名：村上潔、出版社名：洛北出版、書名：『主婦と労働のもつれ その争点と運動』、発行年：2012、総ページ数：334

著者名：天田城介・村上潔・山本崇記（編）、出版社名：ハーベスト社、書名：『差異の繋争点 現代の差別を読み解く』、発行年：2012、総ページ数：309

著者名：立岩真也・村上潔、出版社名：生活書院、書名：『家族性分業論前哨』、発行年：2011、総ページ数：360

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

著者名：なし（無記名）、記事タイトル：「主婦の再就職」高まる関心 書籍続々、発行年月日：2012年10月1日、新聞名：『読売新聞』東京版朝刊19〔暮らし〕面

著者名：伊藤弘喜、記事タイトル：「ワーカーズ・コレクティブ<下> 必要に応じ、多彩な事業」、発行年月日：2012年8月23日、新聞名：『東京新聞』群馬版朝刊24〔地域の情報〕面

発表者名：村上潔、発表タイトル：「いま改めて「おんな」の「運動」について考える」、学会等名：京都自由大学2012年度一般講座、発表年月日：2012年7月27日、発表場所：京都自由大学（京都府）

著者名：水越真紀、記事タイトル：「村上 潔『主婦と労働のもつれ その争点と運動』」洛北出版、発行年月日：2012年7月2日、掲載サイト：『ele-king』（「Book Reviews」）、URL：<http://www.ele-king.net/review/book/002224/>

著者名：小坂綾子、記事タイトル：「主婦と労働 個人と社会 二極化の流れに警鐘 | 生の声届くシステムづくり課題 | 立命館大大学院講師 村上潔さんが本出版」、発行年月日：2012年6月8日、新聞名：『京都新聞』朝刊15〔暮らし〕面

発表者名：村上潔、発表タイトル：「成長戦略の道具とならない女性の「働き」とは?」、学会等名：京都自由大学2011年度特別講座、発表年月日：2011年7月30日、発表場所：京都自由大学（京都府）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 潔 (MURAKAMI KIYOSHI)

立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講

師

研究者番号：00588402

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし